選抜学生による

PIANO CONCERT

2022年10月29日［土］

14:00 開演｜13:30 開場

洗足学園音楽大学
シルバーマウンテン 1F

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

PROGRAM

～2022年度特別選抜演奏者～

R.シューマン／アレグロ　作品8

Robert Schumann(1810-56)/Allegro op.8

梅原 麻音(学2)

M.ラヴェル／鏡より　Ⅰ.蛾　Ⅱ.悲しい鳥たち

Maurice Ravel(1875-1937)/Miroirs　Ⅰ.Noctuelles　Ⅱ.Oiseaux tristes

秋山 結香(学4)

J.ブラームス／パガニーニの主題による変奏曲 第2集　作品35-2

Johannes Brahms(1833-97)/Variationen über ein Thema von Paganini op.35-2

西川 真衣(学3)

-----休憩-----

～ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス～

C.ドビュッシー／映像 第1集より　Ⅰ.水の反映

Claude Debussy(1862-1918)/Images Ⅰ　Ⅰ.Reflets dans l'eau

F.ショパン／バラード第1番　ト短調　作品23

Frédéric Chopin(1810-49)/Ballade no.1 op.23

木暮 萌々香(学3)

J.S.バッハ＝F.ブゾーニ／シャコンヌ 二短調

J.S.Bach=Ferruccio Busoni(1866-1924)/Chaconne d-moll

森 愛竜(学3)

R.シューマン／幻想小曲集 作品12より　Ⅰ.夕べに　Ⅴ.夜に　Ⅷ.歌の終わり

Robert Schumann(1810-56)/Phantasiestücke op.12　Ⅰ.Des Abends　Ⅴ.In der Nacht Ⅷ.Ende vom Lied

吹上 萌(学4)

G.ガーシュウィン／ラプソディ・イン・ブルー

George Gershwin(1898-1937)/Rhapsody in blue

村木 夏帆(学4)

梅原 麻音(学2)

千葉県出身。千葉県立津田沼高等学校音楽コース卒業。2022年度洗足学園音楽大学主催、竹内聡氏指揮の「電子オルガンによる管弦楽とピアノ協奏曲の夕べ」にソリストとして出演し、ベートーヴェン作曲、ピアノ協奏曲第3番を演奏。2022年度特別選抜演奏者認定。第24回日本演奏家コンクール大学の部入選。
現在ピアノを田中美穂、河野元の各氏に、室内楽を古川原裕二氏に師事。

R.シューマン／アレグロ 作品8

ロベルト・アレクサンダー・シューマンは、ドイツの裕福な家庭に生まれ、法律を学ぶために大学の法科に進むが、ピアニストを目指し1828年頃からフリードリヒ・ヴィークに師事した。後に指の故障でピアニストを断念せざるを得ず、作曲家としての人生を歩み始めた。交響曲から合唱曲と幅広い作品を残しているが、文学への造詣も深く音楽評論活動も行っていた。執筆に使われた2つのペンネーム、活発な「フロレスタン」、内向的な「オルゼビウス」は彼自身の2極性を表していると言われている。「謝肉祭」の中にはこの2人をタイトルにした曲があり、「ダヴィッド同盟曲集」では2人を主人公にして曲を書いている。このことからも、シューマンの曲は曲想の変化を繊細に感じ取り弾き分ける事が重要であることが理解出来る。
「アレグロ 作品8」は、シューマンが専門的に音楽の勉強をし始めた翌年の1831年に作曲された。作曲家になる決意をしたのは1832年頃と言われているため、曲想からは彼自身の夢を諦めきれなかったという熱量や葛藤が読み取れる。この作品は、新しい時代のソナタ形式を追求しつつピアノソナタの第1楽章として書き始められたものの完成はせず、単独で出版された。しかしこの曲で試みたことや得たことは、後に発表された3曲のソナタに結実している。
拍子を持たないカデンツァ風の序奏で曲が始まるソナタ形式で書かれており、コーダで曲を締めくくる。2つの主題を持ち、動きのある第1主題に比べ、柔らかい雰囲気の第2主題は、先述の「フロレスタン」と「オイゼビウス」に当てはまる。展開部では特に転調が多く、また強弱の差も激しいことから、他の部分との変化を感じ取れる。付点8分音符と16分音符のリズムとシンコペーションのリズムが多く使われており、またどのフレーズにも内声が隠されているため錯雑な音の響きとリズムの交錯が魅力的である。
作品はエルネスティーネ・フォン・フリッケン嬢に献呈された。

秋山 結香(学４)

千葉県出身。6歳よりピアノを始める。第1回、第2回ヤマハ丸越楽器ピアノコンクール5、6年生の部金賞。第1回ラフマニノフ国際ピアノコンクールJAPAN 第3位。第12回ジュラ・キシュ国際ピアノコンクール大学生部門 審査員賞。その他数々のコンクール入賞、入選。2022年度特別選抜演奏者認定。小林仁、グヤーシュ・マールタ、ルイス・フェルナンド・ペレス各氏の学内特別レッスンを受講。現在、安嶋健太郎氏に師事。

M.ラヴェル／「鏡」より Ⅰ. 蛾 Ⅱ. 悲しい鳥たち

「鏡」はラヴェルが30歳の時に1904年から1905年にかけて作曲した作品で、5つの曲からなるピアノのための組曲であり、作者の心の鏡に映った幻影を切り取り書き出した美しさを放つ作品集である。

第1曲「蛾」
黄昏時に舞う蛾のはばたき、闇の中に伝わるビロードのような震動、夜の光を求める蛾の群れの微妙な動きを、音という鏡に映し出した作品である。絶えず屈折する旋律と、浮遊するように上行し、また下行する、蛾の飛翔の描写が見事に音型とリズム、連符で表現されている。キラキラと煌めくような音の粒立ちと転がるように流れる旋律が極めて美しく、不安定な旋律は、豊かな分散和音の中にその詩的な姿を垣間見せる。

第2曲「悲しい鳥たち」
夏のうだるように暑い午後、迷子になって漆黒の森の中に迷い込んだ鳥を想起させる。孤独なクロウタドリのさえずりを連想させる反復音が響き渡る。調の推移が明確に示唆された楽曲であり、一貫して継続されるオスティナートの八分音符、遠近感をもって聞こえてくる鳥の声、カデンツァの一陣の風が吹き抜けていくようなパッセージ。低音部の淡々とした穏やかな流れと高音部の鋭いタッチの煌めきが魅力的に鮮やかな対照を描き出している。ラヴェルは「"鏡"の中でも、最も個性の強い曲」といっている。

西川 真衣(学3)

長崎県出身。活水高等学校普通科音楽コースピアノ専攻卒業。洗足学園音楽大学ピアノコースピアノ＆作曲マスタークラス3年在籍。2019年メンデルスゾーン作曲ピアノ協奏曲第1番を現田茂夫氏指揮、洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団と共演。第48回長崎県新人演奏会出演。第3回洗足学園音楽大学ピアノコース学内コンクール第1位。室内楽コンサートVol.25～弦・管・打・ピアノ室内楽オーディション合格者による～に出演。2022年度特別選抜演奏者認定。これまでにピアノを黒田照子氏、室内楽を清水将仁氏に師事。現在ピアノを末木裕美氏、作曲を松浦真沙氏、室内楽を浦壁信二氏に師事。

J.ブラームス／パガニーニの主題による変奏曲　第２集　作品３５-２

ヨハネス・ブラームス（1833-1897）はドイツのハンブルクに生まれた作曲家で、ピアニスト、指揮者としても活躍した。1862年から1863年にかけて創作された『パガニーニの主題による変奏曲　作品35』は、イタリアのヴァイオリニスト、ニコロ・パガニーニ（1782-1840）の『24の奇想曲　第24番』を主題にした変奏曲で、第１集と第２集の２冊に分けられ、どちらも主題の後に14の変奏が続く。初演は1865年11月、ブラームス自身によりチューリッヒにて行われた。1862年、ブラームスは生活の本拠をウィーンに移す。
そこで出会い意気投合した高い演奏技巧を持つ名ピアニスト、カール・タウジヒからの「パガニーニの主題を使った華やかな変奏曲を書かないか」という提案により作曲に取り掛かった。この頃、パガニーニの主題を使った先例として、ロベルト・シューマンの作品３や作品10、フランツ・リストのパガニーニの主題による練習曲などがあり、これらの作品から主題に対しての創作意欲を持っていたブラームスは、元々練習曲として曲を構想していた。初版の楽譜には「変奏曲」の横に小さく「練習曲」と記されている。
パガニーニの主題を演奏したのち、ブラームスによる変奏が現れる。右手はオクターヴで左手は平行３度のスケールや、右手と左手の拍子が異なる事で２拍３連のように聴こえるパッセージなど、各変奏に高い演奏技術を要するが、超絶技巧によって生まれる存在感はブラームスのオーケストレーションを感じさせる。
作品はブラームスの弟子、エリーザベト・シュトックハウゼンに献呈された。

木暮 萌々香(学3)

聖徳学園附属取手女子高等学校音楽科にて和田仁氏に師事。
2020年第22回ショパン国際ピアノコンクールinAsia大学生部門全国大会出場。
2021度よりプロフェッショナル・パフォーマンスクラスに編入。現在、大田佳弘、泉ゆりのの各氏に師事。

C.ドビュッシー／映像　第１集より　Ⅰ.水の反映

「水の反映」は、印象派音楽を代表する作曲家、フランスのクロード・ドビュッシーが1904年ごろに作曲したピアノ曲および管弦楽曲（全4集）のうち、第1集のなかの1曲である。
題名のとおり、「水」をテーマに作曲された作品であり、彼の代表曲ともいえる。また、フランツ・リストの「エステ荘の噴水」の影響を受けているとも言われている。曲の冒頭から水が揺らめき光り輝く様子や、水滴などが表現され、繊細かつ色彩的な響きのある印象派の音楽である。

F. ショパン／バラード第1番　ト短調　作品23

「バラード第１番」はポーランド出身の作曲家、フレデリック・ショパンがパリ滞在中の1831年から1835年に作曲した最初のバラードで、彼の初期の代表作である。1836年にシュトックハウゼン男爵夫人に献呈された。この作品はミツキェーヴィチの物語詩「コンラッド・ヴァレンロッド」から着想を得て書かれたという説がある。「コンラッド・ヴァレンロッド」とは、リトアニアの独立のために十字軍を崩壊に導き、祖国リトアニアに勝利をもたらしたポーランドの英雄の戦士の名前である。しかし彼はその後十字軍を裏切ったとして処刑されてしまう、という内容だ。当時、多くのポーランド人がミツキェーヴィチの愛国的な詩に共感し、ショパンにとってもバラードの具体像を描くにあたり影響を受けた可能性は高い。作品はソナタ形式で、冒頭は7小節からなるレチタティーヴォ風の序奏から始まり、主部はソナタ形式らしく第1主題が提示されたのち第2主題が変ホ長調で展開される。そしてコーダの直前では躍動的な激しさをもって終結部へと移行し、ユニゾンやオクターヴを用いた劇的な終わりを迎える。

森 愛竜(学3)

富山県出身。富山国際大学附属高校卒業。
大野由加、山田武彦の各氏に師事。
ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

J.S.バッハ=F.ブゾーニ／シャコンヌ

フエッルッチオ・ブゾーニ（1866-1924）はイタリアで生まれ、主にドイツで活動したドイツ人の母方の祖父を持つ音楽家である。彼は優れたピアニストでありながら、作曲、編曲、指揮者、教育者、そしてバッハなどの楽譜校訂者として活躍していた。作曲家としては新古典主義音楽を提唱し、後期ロマン派の主情性に反対してバロックの厳格な形式や理知的な創作態度を重んじ、「モーツァルトへの回帰」「バッハへの回帰」を呼びかけた。
シャコンヌは16世紀のスペインの舞曲に由来する3拍子の形式の一つで、短いバス声部が反復され次々と変奏が行われていくと言う特徴がある。作品の原曲は、J.S.バッハの〈無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 BWV1004〉の最終楽章である。冒頭の8小節に現れる低音の下行する4音のバスの主題が全体を通して32回繰り返され、そのたびに上声は連続的に変奏されている。この曲はシャコンヌというジャンルにおいての集大成と言っても過言ではないほどの、巧緻を極めたヴァイオリン曲として重要な作品として認知されている。
変奏の構成は原作に忠実に再現されているが、ブゾーニのピアニストとしての類稀なる技術によって、ピアノという楽器の可能性と魅力を引き出させるような編曲が施されており、原曲にも引けを取らない名曲の一つとして数えられている。

吹上 萌(学4)

長野県出身。3歳からピアノを始め、大森晶子氏に師事。
信濃毎日新聞主催、第27回長野県ピアノコンクール5・6年生の部最優秀賞受賞。第32回長野県ピアノンクール高校生の部最優秀賞受賞。その他数々のコンクール入選、入賞。
交流の響き2018inかわさきに長野県代表で出演。第21回ワーブル・インターナショナル・ピアノウィークに参加。2017ピアノフォーラムin仙台に参加。
これまでに、ディアナ・アンデルセン、アラン・ヴァイス、ヨハン・シュミット、菅野潤、庄司美智子、秦はるひの各氏のレッスンを受講。洗足学園音楽大学ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。現在浦壁信二、日置寿美子の各氏に師事。

R.シューマン／幻想小曲集 作品12より　Ⅰ.夕べに　Ⅴ.夜に　Ⅷ.歌の終わり

1810年ドイツに生まれたシューマンは、ロマン派を代表する作曲家の一人で、交響曲から合唱曲まで幅広い分野で作品を残した。特にピアノ曲と歌曲において評価が高いシューマンは、文学に造詣が深いことで有名である。
幻想小曲集は、８つの曲からなりシューマンの恩師であったヴィークの娘クララとの結婚を熱望していた1837年から1838年頃に作曲された。裁判にまで発展した結婚を巡るヴィークとの闘いの年月は、彼の内面を深淵にまで沈めると同時に、結婚を勝ち取るためのための戦う力となり、クララへの愛が言葉なき歌、詩、劇として展開しながら作曲されたと言われている。
第1曲「夕べに」
二拍子でありながらメロディーが三拍子になっており、シューマンが数多くの曲に使用したポリリズム（リズムの異なる声部が同時に奏されること）が現れ、夕暮れが静かにせまる時を思わせる甘く美しい、そして郷愁をたたえた切なさが表現されている。
第5曲「夜に」
ギリシア神話に登場する、ヘーローとレアンドロスの悲劇をイメージしているとシューマン自身が記している曲である。夜は死の世界を意味する。クララを情熱的に思う反面、まるで死の世界へと導かれてしまいそうな不安や恐怖と戦っているようだ。
第8曲「歌の終わり」
オクターヴが折り重なり和音によるシンフォニックな音響に支えられており、これをシューマンは「挙式の鐘と婚礼の鐘が入り混じって聴こえてくる」と言っている。
長いコーダが続き、弱音で回想的にテーマが奏でられ、眠りにつくように静かに曲は幕を閉じる。

村木 夏帆(学4)

東京都出身。中央大学附属高等学校卒業。2021年洗足学園主催、竹内聡氏指揮、「電子オルガンによる管弦楽曲とピアノ協奏曲の夕べ」にソリストとして出演、モーツァルトのピアノ協奏曲第20番を演奏。オーディションにて選出され、「第28回東村山市フレッシュ音楽コンサート」に出演。
ピアノを松山優香、山田武彦、松山元の各氏に、室内楽を清水将仁氏に師事。ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

G.ガーシュウィン／ラプソディ・イン・ブルー

ジョージ・ガーシュウィンは1898年にニューヨークのブルックリンで生まれ、ジャズやポピュラー、クラッシックなど幅広い分野で活躍し、アメリカ音楽を発展させた作曲家である。この曲は、1924年2月12日に、当時最も有名なダンス・バンド・リーダーだった、ポール・ホワイトマンが主催した「現代音楽の実験」というコンサートで初演された。ガーシュウィンはそれまで管弦楽法の勉強をほとんどしていなかったため、まずピアノ独奏とオーケストラの両方を含んだ「ピアノ・スケッチ」を書き上げ、それをもとにファーディ・グローフェがオーケストラ・スコアを完成させる役割を担った。リストの交響詩を手本として自由なラプソディ形式を選び、当初「アメリカン・ラプソディー」と題されていたが、兄のアイラの提案で中間部にブルースを取り入れたことや、2人で観に行ったホイッスラー展の作品、“Harmony In Gray and Green”や、“Nocturne In Blue and Green”にインスピレーションを受けたことから、憂鬱なブルーと、ブルー・ノート（ジャズ及びブルースで用いられる音階）をかけた「ラプソディー・イン・ブルー」という題名がついた。クラシック、ジャズ、ラグタイム、ブルースなどさまざまな要素が次々と現れる音楽は、聴衆の心を掴み、「シンフォニック・ジャズ」として高く評価され、今もなお愛されている。